

「\_\_\_\_\_」は、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編及び  
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編より引用

道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」です。

まず、「道徳性」とは、何でしょう。これは明確に記されています。

- ・「思考や判断、行動などを通してよりよく生きるための営みを支える基盤となるもの」
- ・「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざして行われる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤となすもの」
- ・「人間らしいよさであり、道徳的価値が一人一人の内面において統合されたもの」

ここで、道徳的行為とは、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざして行われる」ものだと規定されています。

つまり、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざして」いない行為は、道徳的行為とは言えないということです。それはどのようなものでしょう。それは、「誰でも、自分に自信がもてなかったり、劣等感に悩んだり、誰かを妬んだり、恨んだりすることがある…自分を律することができず、ついつい怠けてしまうこともある。してはいけないことと知りつつ意地悪なことをしてしまうこともある。自分の利益を最優先にして、他人の不利益を無視して行動してしまうこともある」など、自らの「弱さと醜さ」が動機となって引き起こされる行為です。

また、親や先生に怒られることが怖いから身の回りの整理整頓をきちんとしていることもあるでしょう。他にも、周りの人たちの関係を気にして、心の中では、言いたくないことやしたくないことを言ってしまうややってしまったりしてしまう。他者の存在や他者への意識を自分の考えや判断より優位においてしまうような、主体性のない行為も含まれるでしょう。

その他にも、多額の寄付をして、一見して、道徳的行為のように見えていても、実は、名声が欲しくてやっているだけの行為ということもあります。これは、「もしも、〇〇が欲しければよい行いをする」ということであり、道徳的行為が目的ではなく手段になってしまっています。

これらは、欲やその時々感情に依拠した行為であり、そのときの状況や価値の場によってころころと変わってしまい、「人としての本来的な在り方やよりよい生き方」をめざした行為の対極にある、人としての非本来的な行為といえます。

では、めざすべき「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方」とは、どのようなものなのでしょう。

その昔、「お天道様は見てござる」という言葉がありました。よいことをしたときも、隠れて悪いことをしたときも、お天道様は、すべてお見通しだという戒めです。「よいことをしたらお天道様に褒められるし、悪いことをしたらお天道様に叱られる。誰も見ていなくてもいい、ささやかなことでもいい、よいことをしよう。お天道様は、きっと見てくださっている。」そうして、「よいことをした」と思うとホッと、清々しい気持ちになります。

私たちは、自分で自分の行いや行動の善悪や是非を判断しようとする、どうしても甘くなってしまう。また、周りのことを気にしてしまって、よいことをしようと踏み出せないこともあります。それではなかなかよりよい生き方ができません。そこで、お天道様のお力を求めるのです。ただ、お天道様は、お叱りにもなります。「バチが当たる」といいます。窮地になって嘘をつこうかなと思うと、それ

をご覧になったお天道様は、「おーい」と声をかけてくださり、「嘘をついてはいけない」とおっしゃってくださいます。それでも嘘をついてしまうと、その場は凌げても、後になって嘘がばれてしまって余計に怒られた。「ほら、バチが当たった」お天道様は、そうおっしゃるのです。このように、お天道様は、道徳上の問題場面（価値の場）に出会ったときに、「おーい」と声をかけてくださり、「〇〇するべき」「〇〇しなければならない」「〇〇すべきでない」と声をかけてくださるのです。

そうだとすると、それでは、私たちは、お天道様のことばかり気にかけて行動していることになり、主体的な行為をしていないのではないかという見方もできるでしょう。

しかし、全てお見通しのお天道様は、どこにいらっしゃるのでしょうか。それは、私たちの中、お天道様は良心なのです。自分の思いや考え、行為は、自分が全て分かっています。「気高く生きようとする心とは、自己の良心に従って人間性に外れず生きようとする心である。良心とは、自己の行為や性格の善悪を自覚し、善を行うことを命じ、悪を避けることを求める心の働きである」良心は、常に善であり、感情や欲に対して、人としての在るべき在り方や在るはずの姿を基に、理性的に正しい考え方や行為を「私」に「命じ」るのです。そして、良心からの指令は、「私」にとっては義務であり、「義務の観念と深く関わり、義務を遂行できなかつたとき深い後悔の念を抱き、義務を遂行でき他者との絆を守れたとき本来の自己を取り戻せたとして喜びを感じる。このことは、自己の弱さや醜さと向き合うことがなければ、気づくことができない自己の強さであり、気高さである」

ここで留意しなければならないことは、良心の善というのは、独善的なものでもないし、いわゆる「みんな違ってみんないい」というような、「価値観は人それぞれ」ということではありません。それを認めてしまうと、自国の正義のために他国に戦争をするということを是認してしまうことになり、これらは良心に従った行動とは断じて言えませんし、そういうこともアリだと決して認めることもできません。良心に従った義務の遂行は、あくまでも「人としての本来的な在り方やよりよい生き方」をめざした道徳的行為でなければならないのです。

それでは、みんな同じような生き方しかできないのではないか。「ここで言う人間としての生きる喜びとは、自己満足ではなく、人間としての誇りや人間愛でもあり、崇高な人生をめざし、同じ人間として共に生きていくことへの深い喜びでもある」「人間としての誇り」とは、「自己の強さと、気高さ」であり、「強さ」は、自分の「弱さと醜さ」を挫く良心の力であり、「気高さ」とは、自らの良心を信じて生きる姿勢です。そして、「人間愛」というのは、人間としてもたなければならない愛であり、自分が認識できる自分も含めた全ての人、モノやコトに対して敬意の気持ちをもって大事にすることです。「崇高な人生」とは、「人間としての誇りや人間愛」をもって、一つ一つのことを、毎日、生きていく人生そのものであり、めざすべき「崇高な人生」は、ゴールであって、日々の行為や暮らしの積み重ねの中にあるのです。こうしてみると、道徳は、全く実践的であり、私たちの生活そのものなのです。そして、「同じ人間として共に生きていく」ことを「深い喜び」として感じ合い、「崇高な人生」をめざす同じ人間という限りにおいて、「みんな違ってみんないい」それぞれの生き方ができるのです。

このように、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方」とは、私たちが行う一つ一つの道徳的行為、即ち良心に従った義務の遂行の、その先にある「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な人生」をめざして生きていくことなのです。

2025.6.27 房本 吉弘